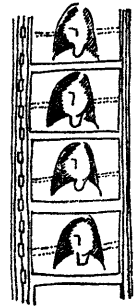


私の保育



田口玲子

「あっ、せんせいきてる。きててよかった。」と飛びはね

るようにして部屋に入ってきて、ひょいと私の顔をのぞ

き込んだのはTくんだった。二月初め、私は一週間ほど

休んでいたのだった。前日、映画会ですでに会っていた

のだが、お部屋で言ってもらえるとまたうれしい。「先

生、やっぱりいる方がいい？」と、私も思わず顔がほこ

ろんでしまう。自分が必要とされることは、なんて張り

合いのあることかと改めて思う。「それにしてもTくん。

大きくなったなあ。」その朝は、Tがひとまわりもぐんと

大きく見えた。明るい光の中できらきらしているTの笑

顔を見つめていると、ふっと四月の頃のことを思い起こ

された。……思えばこの一年、Tとの間にはいろいろな

ことがあった。

四月の第一日目の朝。「さくらぐみにはいるのいやだ。

すみれ（三歳児クラス）のほうがいい。」と玄関にしゃが

み込んでいたTは、しょぼしょぼと小さかった。「Tく

んもう四歳なんだから。さくら組のお友だちと仲良くな

ろうよ。」などと言っても首を振って泣くばかり。自分の

ことばがひどく空しく思えたものだった。

ところで、登園はすぐに何でもなくなつたが、今度は

お帰りの時間が問題だった。「あっ。またTくんがいな

い。」お帰りが近づくと、私は緊張したものである。身じ

たくにも手がかり、まだじっとイスにも坐っていられ

ない二十四人の子どもたちを、部屋に残してTを呼びに園庭へ行くと、Tは悠然とブランコの上。何を言っても、私の声はTの前を素通りしていくだけだった。

ある日、呼んでも「いやだ。」というTに、「どうして？」と聞くと、「だって、せんせい。よびにくるの、はやいんだもん。Tくんもつとあそびたい。」と小さな声が返ってきた。登園してから帰るまで、自由に遊べる時間はたっぷりあるはずなのに、Tは遊んだという実感が得られていないのである。心が満たされていないのである。保育後、その日のTとのやりとりを振り返って見た。

……午前中、三階の年長の部屋で歯科検診があった。Tは部屋には来たが、検診を拒んだ。小屋のウサギに餌をやりながら、Tはのんびりと「たべてる。」とそばにいた私に話しかけてきたが、私は「もういいかな。もういいかな。」とTを連れていくことばかりを考えていた。Tは一番最後にやっと検診を受けた。やってみれば何でもない。「できたじゃない。」と声をかけると、Tは部屋に

あったブロックのロボットを触わりながら、ぼそぼそと「これね……」と話し始めた。けれど私は、その瞬間には、先に降りていった子どもたちのことに頭がいつてしまい、話を聞き取ることすらできなかったのである。

……また、その午後は、相変わらずお弁当箱を出しっ放しのまま遊びに行ってしまったTを探しに園庭へ出てみると、Tはたいこ橋の上からマットに飛び降りる遊びに夢中だった。仲間の中で、いつになくのびやかだった。近づく私にTは、「せんせい。みてみて！」と盛んに呼びかける。ところが私は何とということをしてしまったのだらう。「まず片づけさせなければ。」という考えが先に立ち、「あと五回だけね。そしたら片づけよう。」などという応答しかしなかったのである。Tは「いやだ！」と即座に突っぱねた。後から取り戻そうとしても、もう糸はつながらなかった。

子どもの気持を受け入れることをいつも心がけていたつもりなのに、五月のこの時期、私はTのことになると「早くみんなと同じようにさせなければ。」と焦ってしま

うのだった。また、Tのことに限らず、「この頃、監視役が多いような気がする。注意して回るばかりの接し方で、遊び自体、そして子どもといることを楽しむことが少なくなってきたようだ。」と日誌に自らの反省を記していた時期でもあった。その日から、「Tくんともっと遊ぶこと」それが第一の私の目標になった。

その翌日も、お帰りの時間呼びに行くと、Tはやはり「いやだ。」と言った。しかしその後で、「あかいおうちのおやねにのぼってからね。せんせい、ささえてよ。」と言うのである。「あれっ。いつもと違う。」と思いがながら「いいよ。いいよ。」と私も心はずませてついて行った。私の手に支えられて屋根のてっぺんまで登ったTは、すっかり満足した表情で降りてきた。そのTを両手でしっかり受け止めて、そのまま抱きかかえて部屋に入った。みんなが帰った後、まだしたくができず部屋に残っていたTに、「先生と遊びたい？」とそつと聞いてみた。Tは「うん」とうなずく。その時、ぼつと光が見えたような気がした。

Tは「だれかタオルわすれてる。」とタオルかけに残っていた一枚を私のところにすつと持ってきた。私のためにお手伝いしようとしてくれるその気持がうれしかった。そう言えば、その日の午前中の片づけの時も、Tは自分から部屋に戻ってきて、私が「Tくん力もち？」と聞くと「うん」と言って大きな積木をせつせと運んでいったっけ……。私がTの気持に沿おうとした時、Tもまた私の気持に沿おうとしてくれたのである。

それから後は、時には隣の先生の力を借りて説得したり、時には本気で叱ったりすることもしながら、少しずつお帰りの時間をみんなと過ごせるようになっていった。

ある時、みんながしたくを始めている時、ふと見るとTだけ一人すみっこにぼつんと立っている。そばに『ぐりとぐら』の絵本が置いてあった。「読んでもらいたいんだな。だけと言えないんだ。」私は予定はしていなかったけれど「今日はTくんがこれ読んでほしいんですつ。」とみんなに伝えて、降園前のいっとき、『ぐりとぐら』

ら』を読むことにした。話が始めると、みんなに混じってTは、身を乗り出すようにして絵に見入っていた。

それまで私は、Tを「お帰りの時間」に合わせようとはばかり躍起になっていた。しかし「お帰りの時間」は子どもと共に作るもの。この時間がTにとっても楽しくなるようにすることそれが大事なんだと実感した時である。

さて、お弁当の時には、こんなことがあった。そろそろお弁当にしようとみんなが動き出している時、TとBだけが砂場から戻ってこない。様子を見に行くと、「あのね。このむし、どっかうめんの。」とのん気なことを言う。「これは長びきそうだ。」という嫌な予感がよぎる。

「その虫さん、埋めちゃうの。」などとつき合いながらも、内心ハラハラしている。そのうち、とうとう「お弁当食べなくていいの？ いいんだね。」などとおどし文句まで出てくるようになった。ところが二人は「いいよ。」と全く平然としたもの。これは私の負けである。一旦部屋に引き返し、とにかく「いただきます。」をしてから、

また出直すことにした。

二度目は、半ば私も昼抜きでつき合うことを覚悟していた。しかし、砂をかき出す二人の手をしばらく見ながら、つい出てきてしまったことばは「先生もまだ食べていないんだよ。一緒に食べようよ。」と、ほとんど懇願に近いものだった。その時はちょうど二人とも、やることもやり、気も納まったようで、「じゃ行こうか。」ということになった。私の隣に二人の席を作り、同じテーブルで食べた。二人は口いっぱいほおぼり、顔を見合わせては、にこにこしている。私も「一緒に食べた方がいいでしょう。」と二人の顔をのぞき込みながら何だかとても楽しくなった。

数日後のお弁当の時のこと。私はTと「今日はお弁当のお片づけしようね。」と「お約束」をした。けれどTは食後、やはりいつものように放ったまま遊びにとび出して行ってしまった。部屋をひと通り整えてから「さて」とTを呼びに行くと、Tはブランコの上から私の顔を見て「だってやりたくなかったんだもん。遊びたかったん

だもん。」と言う。そこで私は「じゃ。今ならできねえ。

先生と一緒にいこう。」と励ますように言った。するとTは、不思議なことにさっとブランコを降りて部屋に戻っていったのである。私が手伝わなくても、Tはきれいにハンカチでお弁当を包むことができた。次の日も、やはり初めは「だってできないもん。」と片づけをしぶっていたが、「一緒にしよう。」と力を込めて声をかけると、安心したように動き始めるのだった。そばで見ていると、Tは自分で全部できる。そして私が離れようとすると「できない。」とぼやくのだった。「一緒に」ということが、どんなにTにとって大切なことかわかったような気がした。それと共に、今まで私が、Tに「させよう」とばかりしていたことにも気づいた。「一緒に」といっても、実際には直接手伝うわけではない。ただ私の方は「一緒にしよう。」という気持ちでそばにいて、見守っているだけである。Tはよく「できない。」ということばを口にする。それは、T自身の自信のなさの表われであると同時に、「自分と同じところに立って、心を共に動かし

てくれる人」を求める声でもあったのだろう。そういう人の存在がTの支えになるのである。

一学期の最後の日。朝の短い時間だけ、三階の部屋で終業式のようなものをするようになった。時間になって声をかけると、クラスの子どもたちは慣れたものでパッと一列に並び始める。ところがTだけ一人、「いきたくない。」と頑張る。そこでとにかく他の子どもたちをみんな三階へ連れて行ってから、また迎えに降りた。Tは玄関にぼつんとしゃがみ込み、うつ向いていた。「Tくん。さくらさんだったら行けるはずだよ。Tくん大丈夫だよ。」と初めは励ましや説得に努めていたが、「いきたくない」というTの様子を見ているうちにその気持ちもわかるような気がしてきて、私も隣でしゃがみ込んでいた。すると、もう式が始まって、上の方から元気のいい歌声が流れてきた。その時ふと「行ける」という気がしてきて、私は「行こうよ。」とTの手を取って立ち上がった。するとTもすっと立ち上がった。歩き出してから「あれっ。やった！」と内心驚きの声を上げたのだった。

「行ける」という気がしたあの瞬間は、私の心が、Tの心の波にちょうど重なりつつあったときだったのだろう。Tと同じ空気に浸ろうとしていたからこそ働く感覚なのである。保育は、予測や計算の外にある場合が多い。その日の集まりでのTは落ち着いていて立派だった。

二学期。登園してくる時のTの顔が実にいい。別れ際「ママきいてよ。」というTの話にゆったりと耳を傾けている母親も変わったなと思う。「せんせいおはよう。」「せんせい、みて。」とTの方から大きな声が飛んでくるようになった。

園庭に出ると、「せんせい。」とTが弾丸のように駆けてきて飛びついてくる、そんな時は「よし。」と私もTをがっちり受け止めて、持ち上げたり、ぐるぐる回しをしたり、力いっぱい応えたものだ。

運動会を前に、みんなの気持が浮き立ってくる。そんな中で「Tくんね。もうおねえちゃんのことまでいけんの。」ともうすぐ駆けっこも小学生の姉に追いつくんだと

張り切るTだった。

運動会当日、私は、Tがもしかしたら突然「でたくない。」と言い出すかもしれないという不安で落ち着かなかった。年中のかけっこが始まった。Tもいる。最後のグループの中で、Tはピストルの合図と共に一気に飛び出して行った。ゴールまであつという間だった。Tくんやった……。

お弁当では新しい友だちと坐るようになった。「Tくん。まってやるの。」と食べ終わっても隣でじっと待つT。友だちといるのがうれしくてたまらないのだ。片づけだって、きちんとできる。

お帰りの時間も、クラスの中にすっかり溶け込めるようになった。「ママ。Tくんいちばんだよ。」とお帰りに並ぶときの先頭さんになって誇らしげなT。そして「はやくったね。」と両手を広げて迎える母親。そんな光景に私は「よかった。よかった。」と唯々思うのだった。

さて、三学期。Tはサッカーがしたくて仕方がない。年長さんからボールを借りては、仲間と共に園庭を駆け

回る。「はやくねんちようさんになりたい。」そういう思いが、全身に満ちあふれている。

こうして大きく、たくましく成長してきたTだが、しかしまだ一方で、何か新しいことに直面すると、「できない」と不安がり、そこから逃げようとするところがある。やればできるのに。

これから、新しい先生と友だち関係の中で、いかにこの不安と対決し、克服していけるか、これがT自身の課題であらう。

私は、少し離れて、Tの様子を見ることにしよう。

「私の保育」ということなのに、一人の子どものことだけで終わってしまった。しかし、クラス全体の保育は、一人一人の保育から成り立っている。その子どもを考えずしては、私の保育は語れなかったのである。ここではTくんのことを書いた。他の子どもを取り挙げたら、恐らく随分と違ったものになったであらう。けれども、底の方に流れるものは共通しているに違いない。

この一年間、Tくんはじめ、子どもたちからの様々な抵抗に会う中で、私は何度となく動揺し、無力感も味わわれてきた。しかしそれだけに、心が通じ合い、一つ乗り越えたなと感じたときの喜びはまた、たとえようがなかった。

保育に一つの絶対的な方法があるわけではない。あの時うまくいったからといって、その次にまた同じやり方をただくり返してみてもうまくいかない。それは状況が変わったからというよりも、そのやり方が、その人の人間性から切り離されて、単なる方法に成り下がってしまったからではないだろうか。最初にうまくいったのは、その人が自分自身をそこに投入していたからである。それが子どもに通じたからである。

保育は、その保育者がその時、自分の全人格を相手にぶつけながら、一つ一つ産み出していくもの。私にはそう思えてならない。

保育者になって一年、私の保育は、まだ始まったばかりである。
(横浜学園付属元町幼稚園)